

---

**るけど下手の横好きっぽい、怖がり泣き虫ちょっと人間不信、オタクと普通の間・・・そんな**

nooth-glim

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンタジー大好きで小説が好きでよく書いているけど下手の横好きっぽい、怖がり泣き虫ちょっと人間不信、オタクと普通の間・そんな天然ボケな十三歳が異世界に行くかどうか。

### 【Nコード】

N7967K

### 【作者名】

nooth-glim

### 【あらすじ】

ごくごく普通・・・よりはちょっとオタク、怖がり、泣き虫、天然ボケの十三歳、有那は、裏山でおいしそうな神様の涙に近づいて、空間のひずみに落つこちて死にました。  
ええっ？もう死んだ？空間のひずみに落つこちるなんて普通はない！  
でも、その後も、普通とは程遠い展開が待っていたのでした・・・。

主人公ちよつと（すごく？）チート、めちゃくちゃテンプレ展開のファンタジー・・・になる予定だったんですけどねえ。ちよつとどころじゃなく変わってきそうです。でも、方向性はまだ定まっていらないです。それでも良ければずいとおへ

## プロローグ いきなり死んだっ？！（前書き）

変なところに“っ”が入ってたりしますが、ミスタッチではありません。

私の口調をできるだけ再現しようとしたら、こうなりました。

なお、主人公のモデルは私、作者自身です。

変なこと（ふえ？など）言っていたりしますが、私は実際に口に出して言っています。

『こんなこと、普通は言わないよ！』なんてことはいわないください。

元になった人が変なんだから、話し方の常識はあまり通用しません。

そのあたり、ご了承ください。

では、これを読んで読む気が失せなかった人、どうぞ

## プロローグ いきなり死んだっ?!

）

『わすれはたおもいでくがよみがえるのなぐらぐ』

やっぱり、いい曲だな・・・

「お姉ちゃん！ いつまでパソコン使ってるの！ いい加減代わってよ！」

あ・・・。

「ちょっと！今いいところだから、じやますんな！」

柊<sup>しゅい</sup> あなたなんつーとここで声かけてくるんだ！

「歌の“いいところ”って何？さっきから、ずーっと、ずーっと、ずーーっとお姉ちゃんが使ってるんだよ！」

「お姉ちゃんずるい！お母さんがいないっからってパソコン占領してさー！」

あれ、雪乃<sup>ゆきの</sup>？

「ゆきもパソコンやるの?」

「お兄ちゃんと一緒に“くそゆづ”やるのっ!」

くそゆう？あー、たしかそれって・・・

「それをいうなら“ゆうなま”だろ？」

“勇 のくせになまいきだ”をどう略したら“くそゆう”になるんだっ！

「ある！」

ふえ？　なんか後ろから怒ってる声が・・・？

「“だろ”じゃなくて、“でしょ”と言いなさい！」

なんだ、お母さんが・・・びっくりした。

「ーーーーっ！」

なんか、お母さんが大げさに驚く仕草をした。

や、やな予感が・・・

「返事がないなんて！あゝ、あるちゃんはきつと不良になってしまっただわ！」

大げさにそういうと、目の下に手を持って行ってシクシクシク・・・と口で言い始めた・・・。

どっからどう見ても“ふり”だ。

ただどうこうなったら、しばらくしてから『もう、御飯作る気無くな

った!』とかいいだすんだよな・・・。  
で、その後にごはんのことを言っと、『不良な子に作るご飯はありま  
せん!』とかいって、自分たちで作ることになる。

というか、もうこれはパターン化してる。

「ごめん、ボーツとしてた。ゆき、柊、それをいつなら“ゆづなま  
”でしょ!」

言い直す。ふう、これで一件落着かな・・・。  
って・・・あーっ!

「曲終わっちゃったあ!」

うん、とっくのとうに終わってた。

「あー、じゃあ一区切りしたね。柊たちと代わって」

「わーい!」

弟が嬉々としてパソコン前の椅子を陣取る。

・・・ちえ。

.....

そこで、目が覚めた。

体を起こして、思いつきり伸びをする。白がまぶしい……。

……ん？

つて、えええつ！

「どこどこ？」

なんにもない。真っ白。

どんなにキョロキョロしても景色は変わらない。

「……やっと起きましたか。全く、ここに来て眠ってしまったのなんてあなたが初めてですよ」

目の前に、いきなり黒い背広姿の大柄なおじさんが現れた。  
いや、この年齢だと、おじさんだと怒るかな？

「……今どんな状況だか、わかってますか？」

「い、いいえ？」

おじさんは大きな溜息をつく。

え、えつと……ちょっとモノローグしてみる？

……



・・・思い出した。

そうだ、裏山の中を朝の散歩してたら、甘い匂いがして、まっかな綺麗な飴玉が落ちてたんだ。

キラキラ光ってたから、近寄ってもっと良く見ようと思ったたら、足元が崩れて・・・。

「あ、の・・・私、もしかして、もしかしくとも・・・死にました？」

おじさんは、神妙な顔をして頷き、口を開いた。

「そう、アルナさん、君は死にました。普通だったら、このまま黄泉へ行きます」

ちよつと、引っかかるところが二つ。

「あの、私、アルナじゃないです。“有那”あるなです」

同じではありません、全然違います。発音がね。自分の名前にはちよつとしたプライドがあるの。

「あと・・・“普通”だったら”ってことは、私はふつうじゃないんですか？」

まあ、確かに性格はぼわわんの天然ボケ、人にはよく変といわれるけど・・・  
それって、死ぬのに関係あるの？

「ふつうじゃないのは、死んだ原因です」

おじさんはそういうと、後ろに手を回して、むんずつと何かを前に持ってきた。

何か・・・涙で顔をグシャグシャにした、九歳ぐらいの男の子。

私が唾然としていると、その子はノロノロと地べたに座り・・・

「・・・ごめんなさい」

土下座した。

おじさんは、それを見て少し溜息をつくと言った。

「この方が、原因なんですよ。あなたが見た飴玉は、この方の涙で出来ていました。ちょうど、空間がひずんでもろくなっていたところに多少なりとも力を持ったそれが落ち、あなたがやってきたので崩れたのです。・・・全く、幼いけれど一応創造神なんですから、いいかげんしっかりしてほしいのですが・・・」

おじさんは男の子・・・神様、を睨む。

男の子は、またボロボロと泣き出して・・・

でも泣き虫な神様の涙から飴玉ができるって・・・

「むかし、なきむししかみさまが」

「? どうかしましたか?」

「い、いえ・・・」

・・・まんま、“ドロップスの歌”だ。あの飴はこの子が朝焼けを見て嬉しかったからできたの？

あの歌って、ホントのことだったのかな・・・？

「え・・・えつとね？僕のせいでお姉さんが死んじゃったけど・・・本当にごめんなさい。えつと・・・頼みたいことがあるの」

おちび神様がいった。

「えつとね、お姉さんに、他の世界に行って欲しいの」

・・・はい？

「い、嫌ならいいんだよっ？だけど、行ってくれたら、ここじゃない世界での“あなた”を設定できるのねっ！だから、ものすごい美人にしたり、超能力者にするのもできるのねっ！」

どンドン早口になっていく。

「それにつ！お姉さんがしんじやってるのはまだ誰も知らないから、時間を止めといて、帰ってきたら元の時間に生きて戻ることができるのねっ！・・・あとあとっ、一つ、帰ったあとにも効果が続く願い事を叶えることができるのっ！ほんとに何でもありだよ！」

そこまで早口でいい終わると、ゼエゼエと息を整えた。

「・・・どっ？お姉さん、やってくれる？それとも、このまま黄泉に行く？」

## 第一話 設定と転移

「行きます」

「即答っ?!」

おちび神様も、背広のおじさんもかなり変な顔になっている。

「だあゝって、異世界に行くなんて、そう経験できることじゃないし！能力もろったりできるから、危険もないでしょ？それに、あたし、小説書いてるんよ！ネタにぴったり！」

・・・二人はまだ固まっている。

しまった、いきなり口調とか変わったから驚いてんだ。  
でも、こっちが素だし・・・。

「・・・りよ、了承してくれてよかったです。あなたもダメだったら、間に合わないところでした。」

おじさんが、自分の頭を軽く押さえながら言った。

「え・・・了承しちゃだめ・・・でしたか・・・？」

「そ、そんなことないよ！ホント助かったよ！うん！」

おちび神様は慌ててそういう。

「・・・あとは自分でやってくださいよ」

背広のおじさんは、そういつとすつつと消えた。

「えっと・・・じゃあ、まず行く世界のことを説明するね」

おちび神様の話はカミカミの上に要領をえないので、省略しましょ。言った順に要約してみると・・・。

1 ・その世界は、簡単に言うと魔法と剣の世界。ありがちなファンタジー風かな？

2 ・邦くにごとに大きなお社があり、巫女や邦の第二の為政者、神の声を聞き届ける者である巫覡かんなきがひとりずついる。

巫覡の聞いたお告げは絶対のもので、政治もお告げをもとに行う。

卑弥呼の権力少ない版？

3 ・魔法は、大別すると聖魔法、色魔法、封印魔法の三つに分けられる。

聖魔法は癒しや守りなどの人に良い効果をもたらし、属性を持たないものに限る。強力なものを使える人はなかなかいない。

色魔法には光、闇、炎、水、氷、風、雷、地、樹などの属性があり、誰にでも使える。

それぞれに特徴があり、例えば炎は攻撃に向いていて、比較的誰にでも使えるが、強力なものは制御しづらい。

封印魔法はその名の通り封印された、禁じられた魔法で、大抵強力で、悪い効果をもたらす。闇の魔法が多い。

・・・ってこれだけ？なんか意外に少ない。なんかすごく和洋折衷な感じがするし。

「ねえ、わかった？次に進むよ？」

おちび神様が顔をのぞき込んだ。背が低いから見上げる感じ。

「じゃあねえ……次は“あなた”の設定。どんなのがいい？」

おう、もうそれが。んーとねえ……

「まず見た目からね。髪は十五メートルぐらいの長さで、全体は黒  
なんだけど、先の方1mと前髪と横の短い髪が灰銀って感じなの。  
操れるの。あと……」

「ちょ、ちょっと待ってよ！なんでそんななの？妖怪みたい……  
動けなくなっちゃわない？」

あー、言われると思ってたよ。

「だってさ！個性的なのがいいと思って。そうそう、白のキャスケ  
ットがほしい！頭にかぶると、一瞬で髪の毛の黒いところが全部帽  
子の中にひっこむの。それなら動きやすいし、不自然じゃないでし  
よ？やっぱり背中覆うけど」

……返事なし。

あれ？どうしたのかな？まあいいや。つぎつぎ。

「目は黒に近い紫ね！あと、顔はあんまり美人にしないでね。中の  
上ぐらいにしてくれると嬉しい。服は……えりの立った太ももま  
でぐらいの長さのマントに、普通の無地の長袖のシャツ。シャツは  
少し大きめで、手首のところがすぼまってなくて、首の前の真ん中  
がらセンチくらい三角に切られてるやつね！どっちもちょっと古い

感じで。あ、色は・・・両方とも元は白だったんろうな、って思うような薄汚れた色。マントの裾の端っこに、ちっちゃく水色の刺繍がしてあるといいな！幾何学的なのね。あと、青のミニスカに、紺のズボン。やっぱりヨレヨレで、丈は長め！靴は・・・明るい色だったり、かかとが高かったり、派手なデザインじゃなければなんてもいかな〜！それとねそれとね、なんだっけ、あれ・・・えーつと、あれだよ、ベルトにポーチがついてるような・・・なんだっけ？あ、そうそう、ウエストポーチ！クリーム色の！」

.....

「.....どうしたの？」

おちび神様、全然動かない。おい、どうしたんだい？

「.....お姉さんは変わってるね.....」

なんだ、そんなことが。

「うん、よく言われる。あたしって変だよなー」

「.....」

.....あれ？また固まった。おい、起きろー。

「.....見た目はもういい？じゃあ、次は才能ね」

才能ね.....

じゃあ、まず自分の悩みを解決しようか。

「まず一つ、運動神経バツグンにして！足が早くて、身軽で、体やらかいの」

うんうん。おちび神様は頷いている。

あれ？メモとか取ってないけど、全部覚えられてるのかな？

あ、覚えるといえば・・・

「あと、一度見たこと忘れないようにして！もちろん聞いたことも」

うんうん。また頷いた。

頷くと覚えられるのかな？

「三つ目！演技力を良くして！誰でもころっと騙されちゃうくらいには！」

「はい？」

あ、この話になってから初めてしゃべった。

「え・・・なん・・・やっぱ聞かない。聞いてはいけない気が・・・」

・・・なんか失礼なこと考えてるでしょ！悪いことなんてしませんよー・・・たぶん。

「次は？もうない？」

・・・スルーした？



「えつとね・・・即興で歌とか詩とか作れるようにして！」

うんうん？かわいいーな・・・。

ちよっとおちび神様の頭の上にはてなが浮いてた気がするの、きつと気のせいでしょ！

「あとは・・・能力とかもここでつけるの？」

「うん、そっだよ？」

即答だね。

まあ、当然か。

「あたしが強く思い描いたもの、力を具現化する能力ちからがいい！」

それを言うと、おちび神様の目がまん丸くなった。

あれ？あたし変なこと言った？

「・・・お姉さんのことだから、もつと変なの頼むと思った・・・。そんなのここに来た人ほとんどみんな頼むよ？ありふれてて、チートなの」

ええ？なにそれ？あたしが変なのがいいなんていつ言った！

いつ・・・そっいえば言ったような気が。ま、いいや。

あと・・・

「あたしが使ったら、その人達ほどはチートにならないと思うよ？」

「え、なんで？」

わかりきってることじゃないの。

「あたし、想像力貧困だから」

.....

あれ？またまた固まっちゃった？三度目はつけないよー

「.....はあ.....じゃあ、今言ったことをお姉さんにくつつけるよ。あと、この“あなた”が適用されるのは他の世界だけだからね」

「わかってまーす」

はじめに言っでなかったっけ？微妙に違かった？ま、関係ないことかな.....

「じゃあ、いくよ.....はい、終わり！」

早っ！

「神様だからね！当然だよ！」

自慢気に胸を張るおちび神様。

でも、何も変わんない気がするんだけど.....？

「他の世界に行かないと違いが出ないよー！じゃあ、お願いね」

目の前に、真つ黒い穴みたいなのが現れる。

ゾクッ

背筋が、凍る。

そつだ、一応お仕事で行くんだから、真面目に行かないと。

冷静に……

心の奥の方の、少し火照っていたところがすつと冷え、一真ん中に氷の欠片が生まれる《……………》。

本当に信じられることは何？それ以外は……

私が、私であるために……

心に、そう言い聞かせる。いつもの、おまじない。

「……お姉さん？」

声をかけられた途端、氷の欠片は心の一番下まで沈み、冷えていた心が少し、暖まった。

でも、裏山にいた時よりも、さつき話していた時よりも、ずっと冷たい……。

「……ああ、ごめんなさい。ちょっとブーツとしてました」

おちび神様の方を向き、微笑む《……………》。

「……あ、そつだ。願い事って、今叶えられますか？」

「え？ああ・・・うん。大丈夫だよ」

私が、私であるために・・・  
これが、一番大切なこと。

「真名まなを・・・本当にそんなものがあるのなら、変えて欲しいんです」

おちび神様は、少し目を大きくしたが、すぐに頷いてくれた。

「いいよ・・・何にするの？」

「ニアル・ナアト《niaru naat》。」

私は、すぐに答える。

私の本質。絶対に忘れてはいけない、一番大切なこと・・・。

私は・・・ なのだから。

「じゃあ、行ってきます」

私は、穴に飛び込む。

・・・意識が切れた・・・。

## 第一話 設定と転移（後書き）

こんにちは。

ちょっと話してしまいますと、あの真名には私なりの意味があります。

一種のアナグラムですね。二つの単語を組み合わせています。ひとつはあるな。もうひとつは……。

わざわざローマ字でふりがなをふったってことは……？  
わかりますよね？

あと、感想を書いてくれると嬉しいです。

## 第二話 能力の使い方！

サワサワ……

「……ん……」

目を開けると、そこは……

……深い森の中だった。

……頭痛い。つか、いつの間に異世界に来たんだろう……？  
最後の方の記憶がちよっと飛んでるな……転移の影響？

まあ、大した実害は無さそうだから……いつか。

おっと、現状確認現状確認。ぐるりと回りを見回す。

……人っ子ひとりいませんね。

「……ええ……？おちび神様、もうちよつと交通の便が良さそうなところとか……せめて村の近くとかにしてよ……」

『だって、転移の瞬間を人に見られちゃいけないでしょ？』

……あれ？

「ええっ！？なんで話せるの??」

なんか、頭の中に響いてるよ……。

『まあ、神様だから！それと、ねえ、おちび神様ってなあに？サシヤって呼んでよ！』

「サシヤ？そんな名前だったの？へえ・・・いい名前だね。私のことはこれからはトルムって呼んでよ」

『トルム？有那じゃなかったっけ？』

よくぞ聞いてくれました！

「有那って、たぶんこの世界じゃ珍しいでしょ？だからカタカナの名前にしようと思って。正確にはトルム・ウイン・エレンカー。」

『・・・でも、その名前はダメだと思うよ？』

ええ？なんでさ、結構気に入ってるのに・・・。

『名前と苗字はみんな持つてるけど、真ん中のミドルネームは貴族とか領主しか持てないんだよ。』

なんですと！

「ええ〜・・・じゃあ、トルム・エレンカー？まあ、いいけど・・・」

『ねえねえ！それよりも、ちょっとどんな能力か試してよ！見たい見たい！』

わかったよ！あたしもどんな風になるか、わかんないしね。

・・・最悪使えないというのもある。まあ、試しとくのに越したこ

とほないでしょ！

えーっと、右手を前に出して・・・  
強く思い浮かべる思い浮かべる・・・

「 I m a k e i t . 」

セリフはてきとう。言った方が“作る”イメージ浮かべやすいからね。

右手の中に、全長150センチほどの杖らしきものが出現した。

一番上に直径10センチほどの青い玉がついていて、柄の部分は白、下に行くに従って細くなっていて、先っぽは少し尖っている。

うん、上手くいった！

『へえ・・・シンプルだね。・・・というか、大丈夫なの？自分の身長より大きいの出して』

「う、うっさい！どうせあたしはチビですよーだ！えっと・・・こっ  
うかな？」

両手で杖を前に構えてみる。

・・・おっと、思い浮かべる思い浮かべる。

バチバチ・・・

杖の玉が電気を発し始める。

『おおっ！』



うん、こんなもんかな？

すうつと電気が収まる。

『すごいねー！』

「ありがとう・・・ふふふ」

『え・・・？いきなりどうしたの？』

これで“あれ”の達成も・・・

「なんでもなくい　クスクスクスッ」

そのうち分かるでしょ！

『き、気になるな・・・』

「じゃあ、そろそろ行こっか。“I store it, the  
magic wand.”」

右手から、さっきの杖みたいなのが消える。

『へえ、英語で言うとそのとおりになる・・・それがトルムの“イメージ”？意味は・・・“私はそれ、魔法の杖を収納します”か。そのまんまだね・・・ん？収納？ってことは、またあとで同じの出せるの？』

「うん、そうだね・・・ほら。“I take it out, t

he magic wand.”」

右手の中に、杖が出現。

「あたしが作ったんじゃないのも仕舞えるんじゃない？」

『へえ・・・便利だね』

あ、そうだ・・・

「I take them out, a lot of little magic wands.”」

体の周りに、さっきの杖が15センチに縮んだようなやつが十数本浮かぶ。

『ええっ！いっぱい出せるの?!しかもなんか大きさ違う・・・』

「面白い!“I take them out, quite a lot of little magic wands.”」

今度は数十本も出てきた。

ちなみに、一番最初に出した普通の大きさのも、まだ手元にあるんだな。

「操れたりするのかな?” I manipulate them, quite a lot of little magic wands and the magic wand.”」

普通の杖から手を離す。

すると、その杖を中心に、沢山の小さい杖が回り始めた。

うん、思ったとおりの動き！

あとは……

「I store them, quite lot of little magic wands and the magic wand.”

一旦全部しまつて……

「I take it out, the big magic wand.”

出てきたのは、二メートル近くある大きな杖。青い玉の下のところに、金の鎖がついている。

『デカツ！』

あれ？ちよつと形変わつちやつたかな……。まあいいや。

「I manipulate it, the big magic wand.”

頭の上に浮く。

さすがに、この大きさのは持てない……。

で、で、念じる念じる……。

バチバチバチ・・・

すごい大量の火花が散り始めた。  
雷をまとった青い玉は、中心から光っていた。

『ワアツ?!なんか怖い!すごく怖いよ?!』

うーん、ほんとだね・・・

「・・・脅しとかに使うかな」

『ええっ!今、何気なく恐ろしいことを言わなかった?』

ふふっ

「冗談よ」

『・・・ほんと、君の性格がわからなくなってきたよ・・・』

・・・どういう意味?まあ、いいけど・・・

「他にも考えてるんだけど、イメージが取りにくいんだよね」

なかなか上手く形にならない。

『まあ、もうちよつと慣れてくれば平気じゃない?・・・あと、さつきから思ってたんだけど・・・』

ん?なんか疑問が有るのかな?

「なあに？」

『なれてない状態でもそんなパツと出せるぐらい、イメージがしっかりしてるなんて・・・いったいこの杖は何なの？』

ああ、それが。

「あたしの書き途中の小説の、主人公が使ってる杖。使い方も、そつちで考えたのそのまま使ってるの」

『小説つて・・・そういえば書いてたね。ああでも、すごくへたの横好「うるさーいっ！っというか、なんで知ってるの！」』

書いてたね、書いてたねって！

明らかに前から知ってたような口ぶり！

確かに、さっきつい口を滑らせちゃったけどさ・・・

下手なところまでは言っていない。

さては・・・

「勝手に読んだなあっ！」

怒るぞッ！

『ごめんなさい・・・トルムの書いたの、すごい力持ってる・・・このままじゃ、完結したとき、そのまんまどこかに新しい世界としてできちゃうんじゃないかな、って心配だったんだよ。で、なんかヤバイ設定があるといけないからさ！ちょっと読ませてもらったの』

本当にすまなそうな口調。  
だけど……

「言い訳無用！」

謝ったぐらいで済むかつ！

今実体があつたら、ぶん殴ってやるのに……！

許可なしに勝手に読んで……！

……ん？読んで？あ、そういえば……

「そついやあ、読んだんなら、なんでこの杖をそこからとつたつて  
気付かなかつたの？」

『え……だつて……』

何さね。

『……あまりに描写が下手で、なんん「ああ、もういいっ！みな皆ま  
で言うなっ！』

どうせ、あたしなんて……

『っで、でも！想像力はほんと、たいしたもんだよ！なんでさつき、  
想像力貧困なんて言ったの？』

ええ？だつてさ。

「先生にはよく言われるよ？行動する前に、先のことを想像しなさ

いつて」

なあに、あたしは想像力あったの？

『想像力・・・そっちはないのね』

そっちの？なんか違うの？

・・・ま、いいや。

「ねえ、そういえばさ、なんでこの世界にこさせたの？なんか、用があつたんじゃないの？」

『うーん・・・それが、わかんないんだよ。クロなんだよね、誰かにこの世界に行ってもらおうと言ったの。』

「クロ？」

誰それ。

『背広のおじさんだよ』

ああ・・・へえ、あの人クロって名前なんだ。

『まあ、しばらくは適当にづるづるしてたらいいんじゃない？』

「うーん・・・そうだね。とにかく、まずはこの森を抜けないと・・・」

ガサガサッ

『「!」!』』

その時、いきなり遠くで、大きく木の葉の擦れる音がした。

『やばい・・・誰か来るよ!あ、ちなみに僕と話したい時は、伝える気持ちで考えるとれば、喋らなくても平気だから。じゃあね』』

プツッ

・・・切れた。もしかして、逃げた?

っていうか、プツって・・・電話じゃないんだから・・・。



**第二話 能力の使い方！（後書き）**

4 / 13 一部付け足しました。

ちよつと違和感があったので・・・。

### 第三話 た・・・のしい！

藪を掻き分けるような音は、どんどん近づいてきた。まだ、100メートルほど離れてるけど。

「マズイな・・・こんなに複雑だったとは」

「バレたら殺されんじゃねえか？ハハッ」

「わあーっ！まだ死にたくないよう！」

それでも、聞き耳を立てると、会話はとてもよく聞こえてきた。聴力の強化は頼んでないよ？もともと耳はいいの。

学校の校門の前から、校舎の三階の教室で針が落ちた音だっただけに聞き取れるよ

柊曰く、『忍者並み・・・いや、忍者どころじゃない。お姉ちゃん、いつ人間やめたの？』とのこと。

流石にこのセリフを曰のたまいやがった時は、広辞林ほおつてやったけど。いやー、まさかヒットするとは思わなかった。しかも鳩尾みぞおち。だって、元は運動神経ゼロすつ飛ばしてマイナスの域だった、あたしの投げたボール・・・じゃなかった、広辞林だよ？まったく、柊は丈夫だねえ。

・・・おつと、話が脱線した。戻し戻し。

あたしはそんなわけでその男たち（あ、近づいてきてたのは、三人の男。デカマツチヨとのつぽとデブ。流石に顔は見えないな・・・）

の会話を盗み聞きしてたわけですけど……。なんか一つ恐ろしい言葉が出てきたね。何、殺される？  
怖い……。でも……。……。気になる。

……。ちよつと覗見してみる？

で、三十分後。男たちはようやくとあたしの近くまでやってきた。なんでそんな時間かかったんだ……。と思うでしょ？三人の動きが原因なんだよ。

三人は、なんどもなんども歩く方向を変え、延々ぐるぐる同じところを廻ってた。

まるで、複雑な迷路に迷っているように。

三人の会話も『あ、そこは右じゃないか？』とか言ってる、思いつきり迷路攻略中っぽい。

だけど……。私にはただの森にしか見えないんだけど？

それに、たまに藪に足を突っ込んだりしてんのに、なんも反応しないの。

茨に突っ込んだりした時もあるんだよ？それも、一回や二回どころじゃない。あれ結構痛いのに……。。

……。そんなこんなを繰り返して、やっと三人はあたしの近くまでやってきた。

「さつきと少し、壁の様子が違うな」

「絡みついた蔦がだいぶ減ってきてる。ハハッ、もうすぐ出口なん

「じゃねえか？」

「やったーっ！ここから出られるようっ！」

「っっていうか……人相が悪い。どっかの山賊みたいだよ……。服もそれっぽいし、腰に剣下げてるし。」

「でも……やっぱり迷路なの？」

「やっぱり、この人達の頭がオカシイの？」

「ここは……右だ」

「一人がそういうと、三人とも右に曲がった。って……あたしの方に来てない？」

「わっわっ！ど、どうしょ？」

「オロオロとまわりを見回していると……三人と目が合った。」

「パチンッ」

「その瞬間、何か弾けるような音がした。」

「一瞬、大気が揺れる。」

「大気……？違う、これは……。」

「な、なんだ？おまえ！」

「はっ！しまった！見つかったあ！」

「……まあ、目の前につん立ってて、そりゃないだろ、とも思っけ」

ど・・・

さっきまで全然気づいてなかったから・・・気づかないのかな？と

「なんで、こんなところにいるんだ？なあ、嬢ちゃんよお」

「よく見たら、結構可愛いじゃないか。ハハツ、こんな山奥にいないで、僕たちと一緒にこないかい？」

「わあーいつ！やっと抜けたよう！」

うわー・・・最悪。

これが嫌だったから中の上にしてもらったのに・・・意味なし？

一番後の人はスルー。

『トルム・・・何やってんの？』

あ、サシャ！今の今まで何処に行ってたんだよ！

『山賊にナンパされてんの』

伝えるように考えたけど・・・  
えっと、これで通じる？

『それは攫われかけていると言わない？』

ああ、そっか！

『そっという考え方もあったね』

『あつたねって・・・じゃなくて、伝言があつたんだつた』

伝言？

「おい、嬢ちゃん！何シカトしてんだ？ああつ？」

おっと・・・しまった。

「ごめんごめん、あまりに在り来りなセリフだったんで、劇の練習でもしてんのかと思つた」 / 『伝言つて、誰から？どんなの？』

返事はしないとね。

「なんだとお・・・っ！」

『え・・・ええっ？今、何がおきたの？』

おや、同時に返事が帰ってきた。

「だって、その通りなんだからしようがないでしょ？ちゃんと返つてくださいな」 / 『何つて・・・普通に話してるだけだよ？』

『え・・・えええっ！やっぱり念話と普通の会話、同時にやっつてるっ！』

あれ？サシヤからだけ？

『普通じゃないの？』

『ぜっんぜん！普通じゃない！二つの違うことを同時に考えて、両方共疎かにならないなんて・・・ありえないっ！』

ええ〜？ そうなの？

『このくらいなら、前からできてたけどなあ・・・お父さんは、四十人に一人ぐらいの割合だって言ってたよ？ それほど珍しくもないと思うけど・・・？』

この割合って、かなり多いよね？

『質が違うっ！ なんだよそれ！ 僕でも出来ないからっ！』

ええ〜？ おかしいなあ。

「・・・っ！」

ヒュウッ

と、いきなり空気を切るような音が聞こえて、何かがあたしに向かって振り下ろされた。

反射的に身を翻し、おろされたそれを片手でつかみ、ねじるように手首を回す。

「っわっ！」

男の手から剣が滑り、私の手に残る。

うん、上出来。 泉水先生せんすいに、護身術の触りだけ教えてもらっという良かった。

・・・っと。 そんなこと言ってる場合じゃなかった。

「・・・バカにしやがって」

「ハハハッ、お嬢さんだからって、もう手加減はしないよ」

「うわーっ！剣がとられちゃったよう！」

ここに来て、私はやっと三人の言葉を意識した。上から、マッチョ、のっぽ、デブ。

ふーん・・・セリフからすると、いきなりあたしに斬りかかってきたのは、デブくんか。

「ハハッ、よくもさんざん無視してくれたね」

のっぽは、そんなことを言い出す。

無視って・・・ああ、サシャと念話してたときか。

話しかけられてたの？全然耳に入らなかつたんですけど。

そのことを言ってみるか・・・反応が面白いし

「なんのこと？全然気づかなかつたけど。っていうか、声小さすぎない？よくそれで山賊なんて務まるねえ」

・・・実際は、この三人の声はかなり大きいです。頭が痛くなるくらい。

それで、無意識に外の音を聞かないようにしてたんだな、うん。普段は結構役に立つ特技だけだね。悪口言ってた時とか。

てか、山賊って言っちゃった・・・違かったらどうしよう？



「んなつ……！なんで僕たちが山賊だって……」

あ、当たってみたい。

なんでって……

「見ればすぐわかるんですけどねー」

『トルム……何挑発してんの』

あ、サシヤ〜。

『だって、楽しいんだもん』

それ以外に、何がある？

あ、ちなみに、今あたしはひたすらニヤニヤと笑っています。

笑いというより、微笑と言った方がいいかも。

さてさて、どんな反応するかな？

『はあ。……トルム、ここの番人から伝言』

え？

『番人？そんなのいるの？』

あたしたち、他人の領地に勝手に来ちゃったわけ？

『……ここは、聖域なんだって。人が入ってこないように、絶対

に抜け出せない幻術と邪気を防ぐ結界を張っておいたのに、トルムが壊しちゃったから、怒ってる。で、その余波で起きられなくなっちゃったから、番人の振りをして、その三人をここから追い出しといて……だつて』

ええ〜！なにそれ！

つてか、さっきのなんだかわかんない……少なくともただの大气じゃない、何かが震えたのつて、そのせいかな！

あたしのせいなの？

めんどくさいけど、まあ……

『いつか。わかったよ』

この三人を追い出せばいいのね……簡単簡単。

あたしは、ちらっと三人に目を向ける。

……なにやらこそこそと話してるねえ。まあ、そつちのが好都合かな？

『具体的には、僕の方からその都度伝えるから。番人には番人の作法があるらしいから、それに従つて、だそうで』

『はいはい』

なかなか面白そうじゃない。

……

……

・

「・・・もう、道化はやめにしようか」

あたしは、三人に向かって、さっきまでと声の調子を変えて話しかける。

「「「・・・！」」」

三人はあたしを見ると、目を見開き、構えた。

サシャの力で、今のあたしは青く光って見える・・・らしい。  
自分じゃ見えないのは、残念だなあ。

『私が誰だかわかる？』

サシャが、何を言えればいいのか、大体の内容を念話で伝えてくれる。  
まあ、いろいろアレンジするけど。

「さてさて・・・わたしは誰でしょうね？」

そういうと、あたしはクス、と微笑む。

・・・わー、きつともものすごく怖いぞ、今。

『何をしにここに来たのかはだいたい分かる。』

「何をしに来たのかしら・・・まあ、だいたいわかるけど？」

クスクスッ

あたしは、楽し気に見えるように笑う。あー、演技力をもらって  
いて良かった！  
実際、結構楽しいし

『この地の秘宝を狙うなぞ、おりよっ・・・愚かしい者どもめ。そ  
こまでして力が欲しいか』

「そーんなに・・・秘宝が欲しいの？バカもここまで来ると何も言  
えないわ。力を欲するなんて・・・人の癖に、愚かねえ」

その笑顔のまま、すこしずつ殺気を出す。  
三人はそれを感じ取り、どんどん青ざめていく。

・・・やばい、癖になっちゃうかも。

つてか・・・サシャ、今噛んだよね。紙を読み上げているのかな？

『・・・逃げるのなら、今のうちだ。それとも、私と戦うか？おま  
えたちに、その覚悟があるか？』

「逃げる？今だったら見逃してあげるわよ？それとも・・・わたし  
と戦う？その覚悟があるのなら、秘宝を手にするチャンスと・・・  
死よりもなお辛い、苦しみを与えてあげる。I t a k e i t  
o u t , t h e m a g i c w a n d .」

そういうと、あたしは右手の中に杖をだし、クス、と笑う。  
それと同時に、杖の先端の青い玉が、バチバチ・・・と雷を発し始  
めた。

「ひいつ！」

のっぽとデブが悲鳴を上げ、後ずさりする。  
マッチョは動かない。

でも、足ががくがくしてんのが、よくわかる。

・・・あとちよつとかな？

『そうか、ひかないか。ならば命は捨てるのだな。安心しろ、おまえたちの屍は、そのまま故郷の社へと送り届けよう。一滴の血も損なわないさ。巫覡さまはきつと、丁重に弔ってくれるだろう』

「ふーん・・・そう。じゃあ、もうその命は要らないってことね。  
・・・まあまあ、安心なさい？あなた達の亡骸は、丁重に故郷の社、巫覡のもとへ届けてあげる。大丈夫よ、心配しなくとも、血も一滴残さず送ってあげるから。巫覡さまに、盛大なお葬式でもあげてもらいなさい？」

ポウ・・・

あたしのまわりに、蛍のような光が現れる。だけど、光源は見えない。

サシヤったら・・・なかなかいい演出だね。

「ひいつ！ お、お許しをー！！」

三人は、転げるように駆け出し・・・目の前からいなくなった。

ふー、楽しかった！

『トルム・・・なんて言うか、迫真の演技というか・・・怖かったよ』

サシヤがちよっぴり震えた声で言った。

あら、今更何を言ってるの？

『当然。そのつもりでやってたんだからね・・・てか、あたしに演技力くれたのって、サシヤでしょ？神様からもらったんだもの、そりゃあ普通よりも上手くできるよ』

『・・・そうだね。でも、ちよっとどころじゃなく心配なんだけど・・・』

ん？

『ちよっと、どついう意味？』

なんか悪い意味で言ったでしょ！

『何でもないよ・・・ほら、森を抜けるんじゃないの？』

あ、そうだった。あぶないあぶない、忘れるところだったよ。

「さ、行くー！」

### 第三話 た・・・のしい！（後書き）

現時点で819アクセス、350ユニーク。  
ありがとうございます！

番外編 1 ……あなたはなんなの？ (前書き)

トルムが山賊相手に遊んでいる場面を、サシャ視点で書いてみました。

といつても、その描写はまったく出てきませんが。

…トルムがどんだけぶっとんでるか、その確認みたいなのです。本編に関連させるかもしれないし、まったく関係なくなるかもしれません。

あしからず。



番外編 1 . . . あなたはなんなの？

side サシャ

. . . . .

トルムに指示を出しながら、しばらく様子を見てた。けど . . . 何？なんか、すごく心配 . . . 。

大丈夫なの？ . . . いや、トルムが、じゃなくて、世界が。世界までは行かなくても、まわりの人達の安全が . . . 。

っていうか、能力がかなりの速さで上達してる。使ってないのに上達するって何？実は人間じゃないとか . . . ない。

まあ、念のために調べよつか。

そんな軽い気持ちで、トルムの魂をスキャンする。これは、魂の持つ力を50を平均として、0～1000の整数で表すものだ。

さあて、結果は . . . あれ？  
なんか . . . オカシイ。

精神力：60～85

運動能力：97

運：35

神秘性：65

音楽性：99

・・・まあ、ここまではいいんだよ。

運動能力が高いのは、僕が上げたからだし、精神力は場面によって結構上下する。

運が低いな・・・このせいでひずみに落ちちゃったのかな？でもまあ、この程度なら許容範囲。

あとは・・・音楽性がずば抜けてる。でもまあ、これは才能によるもので、高くても別に珍しくない。

神秘性は、元々は神とか、その眷属とか固有の性質だったんだよね。だけど、大昔からの混血で、最近じゃ人間も少しだけ持つてる。

だけど全くない人も少なくない。そりゃそうだよ、混血の子孫しか持つてないんだもん。

だから元々の平均が低く、これだけ40に設定されてる。そう考えるとちょっと高いかな・・・でも、そんな感じしなかったけど？

潜在的なものなのかな。世が世なら、巫女にでもなれたかもね。

・・・おっと、話がそれた。問題は・・・この先。

創造性：89

勘：30～90

信頼性：5～95

行動力：30～90

カリスマ性：0～98

なにこれっ！創造性が大変だよ！

これが60前後だと、ものづくりの才能程度。でも90近くって・・・。

どうりですぐにイメージ出来ると思ったよ！

次、勘。なに？前後するってどういうわけ？しかも上限が90。同じことは行動力にも言えるよっ！普通は変化しないから！

信頼性が5〜95、カリスマ性が0〜98。

これも、ちよつとどころじゃなくオカシイ。なぜにそんなに幅がある？！ってか、普通動かないからっ！

これって、ある時にはであった瞬間信頼されて結構人が集まってくるけど、ある時は信用されなくて、何かあったら真っ先に疑われ、証拠がなくても追放または逮捕ってレベルだよ！

・・・で、最後。これを見たら、もう、上のが可愛く思えちゃう。

耐久性：1250の10乗

・・・これねえ、魂の耐久性を表してるの。精神力とは違うからね？

魂の耐久性っていうのは、時空間を転移するときとか、空間を震わせるほどの大技を出した時とかに出る余波に、どれだけ耐えられるか、ってということなんだけど・・・。

・・・なにこれ、1250の10乗？おかしいなあ、これって、100までじゃなかったっけ？しかも、なぜに累乗が出てくる？これって、いくつぐらいになるんだろう・・・。

・・・え？9313225746154785156250000  
000000？

いや、数字で出されても・・・。

九百三十一穰三千二百二十五禾<sup>りく</sup>予七千四百六十一垓五千四百七十八京五千百五十六兆二千五百億？

・・・ますますわかんないからっ！

・・・まあ、神を軽く越すぐらいには丈夫なことが分かりました。

.....。

あと、性格がちよっと破綻してんだよね・・・。  
山賊を脅しながら、結構楽しそうだったし。

・・・ますます不安になってきた。

番外編 1 . . . あなたはなんなの？ (後書き)

サシヤ「無茶苦茶なあっ！」

おーう、気持ち分かるよ。

でもまあ、本人には言わないでいよーね。

サシヤ「うー．．．」

現時点で1250アクセス、468ユニークです。  
ありがとうございます！

サシヤ「コメントも随時受け付けてます」

酷評辛口指摘、なんでもござれです！

## 第四話 サシヤ参戦！WWW

side トルム

.....。

.....。

.....。

「もー、いつになったら抜けられるのお！」

あれから一時間弱、あたしはまだ森の中を歩いていた。

『トルム・・・もしかして、方向音痴？』

「うつさい！気にしてんだから・・・」

わざわざ言わなくてもいいじゃんか！

『.....あーもう！見てられない！』

「へ？」

いきなりサシヤが叫んだ。

なに？何事？

ブツッ

.....

ええ？なんで切る？

と、その時。

キーンッ！

後ろで、そんな音が聞こえた。

文字で見ると頭が痛くなりそうだけど、そんなことはない。

振り返ると、空中のなんにもないところが、光っていた。

え？なに？

s i d e o u t

s i d e サシヤ

・・・トルムは、さっきからずっと森の中をさまよっていた。

「もー、いつになったら抜けられるのぉ！」

いきなりそう叫ぶ。

・・・まあ、気持ちはわかる。ってか・・・

『トルム・・・もしかして、方向音痴？』

さっきからそうじゃないかと思ってたんだけど……。

「うつさい！気にしてんだから……」

すぐに反応があった。

ああ、やっぱりそうだったのか……。

と、トルムはまたとんちんかな方に行こうとする。

う……。

『……あーもう！見てられない！』

「へ？」

トルムが素っ頓狂な声を上げるが、気にしない。

もう、そっち行くから！

キーンッ！

そして、空間が光った。

side out

side トルム

なにになになに？なんでいきなり光りだす？

あたしは、二、三步後ろに下がる。



光は、いきなり縮まり始めた。  
そして、限界まで小さくなると、そこから少し小さな人の手が現れる。

えええっ??なにになになになにつ?

手の次は顔、胴体、足。

順々に、光の中から出てくる。

・・・ってか、あれはどう見ても人だよな?  
しかも、五歳くらいの女の子。

そして、体が全部出ると、最後に大きな翼。

・・・翼?

えええっ!天使っ?

女の子は翼をすべて光から出すと・・・落っこちた。

おいっ!羽あるんなら飛ぼうよ!

あわてて、あたしはその子の下に行く。

広げた手のところに、女の子は落ちてくる。

トサッ

お・・・セーフ。

女の子は、気絶しているようだ。

でも、こうしてみると・・・可愛いな。  
髪なんて、ほとんど白に近いきれいな銀。

まあ、あたしは好きでこの色にしたんだけどね。

「・・・う、うーん？」

あ。

「大丈夫？天使みたいな人」

それを聞くと、女の子はビクツとして、慌ててあたしの手から飛び降りる。

「見たねっ・・・って、トルムか。あー、びっくりした」

深紅の目がクリクリして、とっても可愛い！この色の組合せって、アルビノみたいだな。  
って・・・

「なんであたしの名前知ってんの？」

女の子は、それを聞くと目を点にした・・・気がする。

「え・・・トルム、面白くない冗談だね」

ええ〜？

「あたしには羽はえたアルビノの女の子の知り合いなんていないよ？」

「へ？」

女の子は、素っ頓狂な声をあげる。

「え……ちよ、ちよっと待って」

女の子は、どこからともなく鏡を取り出して、しばらく眺めていたが……

「えええ〜！なにこれっ！女の子になってるっ！」

はい？女の子になってるって……

「元は違かったの？」

「何を……って、これじゃわかんないよね。僕だよ、僕。サシヤだよ！」

……いきなり何を？

「……信じてない顔だね。証拠ならあるんだよ！」

『僕、今トルムの目の前にいる女の子は、サシヤです！』

！ 頭の中に、念話の音が響く。

ええ〜……じゃあ……

「えっと・・・サシャ？なんでこんなところに・・・てか、なんで女の子？」

・・・信じるしかないよね・・・。

「なんでって、トルムを見てらんないから。かつこの方は僕にも何が何だか・・・」

見てらんないって・・・あたしが頼りないってことっ？  
・・・たしかにそうか。

「ってわけで、僕もついてくから」

「うん」

まあ、会話の流れからしてそうなるよね。

「・・・じゃあ、行こっか。森を抜けるのは、こっちだよ」

サシャは、くるっと振り向く。

ええ？あたし、逆の方に行こうとしてたの？

「あ、そうそう。街に出たら、サシャって呼ばないでね」

ええ？なんで？・・・って、こればかり言ってる気が・・・。

「サシャは真名だから。でも、これ以外の名前は持ってないから、戸籍はトルムが全部書いてね」

ええ、めんどくさい……じゃなくて。

「戸籍書くつて?……まさか、偽造する気じゃ……!」

違法だよ、違法!

「ち……っ!違うよ!それがこの世界の常識なの!」

サシヤは、本当に慌てて言う。

ええ?なにそれ?

「……まあ、ずっとここにいるのもなんだから、歩きながらにし

ちね

……はい。

## 第五話 “星屑の都” ラグーン

サワサワ……

ん……風が気持ちいい。

「トルム……聞いてる？」

「あ、ごめん」

森の中を歩きながら、あたしはサシヤにいろいろ説明してもらっていた。

てか……はじめに話そうよ、そういうことは。

「えっとね。この国では、戸籍を、生まれたときに登録するんじゃないの」

「へ？なんで？」

それじゃ、意味なくない？

それを聞いたサシヤは、全長2メートル近くある純白の翼をパタパタさせながら、訳知り顔で言った。

……てか、邪魔じゃないの？虫が飛んでってくれるから、あたしとしてはいいんだけど……。

「この国の機能の仕方が、日本とかとはだいぶ違うからね。こっちの方が、都合がいいんだよ」

・・・よく分からない。

「えっと・・・大抵子供は、独り立ちできるぐらいになると、故郷を離れて、本役所のある大きな街、“都”まで行くの。そこで、生年月日、年齢、名前、現住所、職業などを登録する。そうすると、どんな年齢でも世間では“成人した”と認めてもらえるし、国の方でも、戸籍登録者を成人としてみている。だから、この国の人口は大人の分しかないんだよ。正確な人口は出せない。でもまあ、学校とか保険とか、そういうのがないから、このままでも別に困らないんだよね・・・国がなくなっても、十分自活していける」

ふむふむ。

「理由はわからないけど、理屈はわかった。あたしたちにとっては、かなり都合のいい制度だね」

ここまで来ると、もはやご都合主義。

大丈夫なの？この国。

「まあ、隣の国は流石にこの制度は採用してないよ・・・あと悪いことをした人は、この国の本役所に顔とかの連絡行くから、隣の国から逃げてきて、こっちで戸籍とって・・・とかはできないわけ」

なるほど。そうすれば、なんとか大丈夫かな？

・・・まだ穴がありそうだけど。

「幸い、ここから一番近い街は“星屑の都”ラゲーンだから、着いたらさっさと登録しちゃおうね」

「そうだね」

そうと決まれば、セカセカ歩こう！

・・・三十分後。

ようやくと、ラグーンのすぐ近くまで来たらしい。目の前の大きな茂みを抜けたら、“都”のはずれにでるんだって。遅いって？そりゃそうだよ、初めに居た聖域は、森のど真ん中であつたんだもの。

でも、もうつくぞ！

まず、サシャが茂みを突っ切って行こうとする。

翼が引つかかって、痛そう・・・  
・・・翼？

「ワーツ！サシャ、ストップ！」

なんかカタカナばっか・・・って、そんな場合じゃない！  
あたしは、サシャに飛びつき、こっち側に引っ張る。

サシャは、後ろにひっくり返った。

セ、セーフ。

「なにすんのっ！」

いきなり飛び起きる。  
何すんのって・・・



「それはこっちのセリフだっ！その羽どうすんのっ！」

おっと、口が悪くなってしまった。

サシャは、ハツと背中を見る。

そして、あたしに向かってバツの悪そうに・・・

「ごめん・・・忘れてた」

まったく・・・忘れないでよ。

翼が、光と共に消える。

「さ、いくよっ！」

あたしは、それを見ると茂みを飛び越した。

・・・いや、別にそんなことしなくてもいいんだけど・・・気分だよ気分！

運動神経がどれくらいになったのか、知りたいしね。

ヒョーイっ

とても余裕たつぷりに飛び越せた。

うーん、さすが神様パワー。ふつうじゃないね。

サシャも、茂みを突っ切って現れた。

勢い余って、あたしに突っ込んできたけど。もちろん、受け止めましたとも。

「さあ、れっしゅー！」

あたしは、そう叫ぶ。気持ちをシャキッとさせないとね

・・・サシヤが変な目で見てたのは、気にしない。

・・・“星屑の都”ラグーン、正門。

わあ・・・

「おっきいー！」

目の前には、豪華な装飾の施された、巨大な門があった。  
すーい、すーい！

・・・変な目で見ないでよ、ってか変じゃないからッ！

あたしのまわりにも、似たような反応の人多数だよ？

「姉さん、早く行こうよ！」

サシヤが門の前で手招きをする。

あ、ちなみに。サシヤに、姉さんって呼んで、と頼みました。  
だって、その方が後々楽だと思っただよ！色合いは違っても、同じ  
銀髪だから、“きょうだい”でも普通に通じちゃうし。  
戸籍も、同じ名字で出すつもり。ふふふ・・・

「あ、ルーン。今いくよ〜！」

サシャは、“ルーン”になりました。戸籍的には“ルーン・エレンカー”の予定。

あたしが考えたんだよ！

門をくぐる。

「「わあ・・・！」」

二人揃って、思わず声をあげる。

だつて・・・！

広い道を行き交う、カラフルな髪、目の人々。  
軒を並べる店から聞こえてくる、元気な声。

そして・・・道の向こうの、おっきな建物！

「あの〜、あそこの建物は、なんですか？」

ちょうど隣を通った女性に、尋ねてみた。きれいな金髪に、蒼い目。  
う、うーん・・・美人さんだ。

「あれ？本役所よ。戸籍を作りに来たの？」

「はい、そうです」

「丁度いいわ。私も、そこへ行くとところだったのよ。案内しましよ  
うか？」

美人さんは、そう言ってくれた。美人なだけじゃなくて、親切でもあるなんて、素敵でも……

「大丈夫です。もう見えてるし」

さすがのあたしでも、これは迷わない。

「ふふっ、みんなそう言うのよね。でも、此処から先は結構入り組ん出るわよ？」

美人さんは、ニツコリと微笑む。

……ヤバイ、見とれてた。っていうか、むしろ見惚れてた。

あ、あたしはそっちの気はないよっ！

「ほら、行きましょっ？」

「姉さん、行こっ！」

あ、サシヤ、いつの間に！

美人さんについてってちゃうし……。

「ま、待ってよー！」

## 第六話 登録・・・と不信（サシャだけ）

side トルム

美人さんに連れられて、店と店の間を通る。

・・・なんでこんなに店が乱立してるの？

「昔はね、ここは“都”じゃなかったから、この場所は大きな一本の道じゃなかったのよ。ここよりも手前は、街の一部ですらなかったらしいわ。それで、昔の店がかなり残っているの。・・・ほら、このあたりって老舗が多いでしょう？」

美人さんが、気持ちを読み取ったように説明してくれる。確かに、“創業 年”とかいっぱい書いてあるね。

「ね、姉さん！待ってよ〜」

サシャが後ろの方で言う。

あー、置いてかれてるね。

「もう、しょうがないな・・・うんしょっと」「ふえ?。」

あたしは、サシャをだっこする。

あたしにも、弟妹がいるからね。ちっちゃい時は、よくだっこしてあげてたっけ。

・・・年は2つとか4つとかしか変わらないけどね。

「な、なにすんの！おろしてよー！」

サシャが、顔を真赤にして暴れだす。恥ずかしいのかな・・・でも、おろさないよ？

「だーめ。はぐれるでしょ？」

背がちっちゃいんだから、こうしてないと・・・手をつないでも、なんか不安。

「うー・・・」

サシャは、それを聞くと、暴れるのをやめた。

美人さんが、クスクスツと笑う。

「本当に仲がいいのね。・・・あなた達って、血が繋がってるの？それとも、いわゆる“義兄弟”？」

へ？

「「義兄弟？」」

おう、かぶった。

「ふふふつ、義兄弟っていうのはね、本当に仲の良い人達が、戸籍を登録するときに、家族として登録しちゃうこと。特に珍しくもないのよ？身寄りの無い孤児同士が、お互いになにかあったとき、すぐに分かるようにしてする場合の多いしね。・・・本当の家族はいないけど、でもせめて、仲の良い人には知らせたい、ってこと・・・

あるでしょう?」

美人さんは、微笑みながら説明してくれる。  
へえ……いいね、そういうの。

「……ほら、着いたわ」

美人さんが、前を指差す。

目の前に、さっきの巨大な建物があった。

「あ、ありがとうございます!」

「いえいえ、いいのよ。それじゃあ、私は行くね」

美人さんは、本役所の横を通って、向こう側に行ってしまった。

「……姉さん!おろしてよ!」

サシヤが、また暴れだす。

おっと、しまった。

「ルーン、ごめーん」

慌てて、下におろす。もうだっこしてる必要ないもんね。

「早くいくよ!」

サシヤは、走って本役所の方に行く。

「あ、待ってよ!」

もちろん追っかける。飛び込むように役所の中に入った。

ゴン

「つて！」

と、そのとたん、何かにぶつかった。  
イタタ・・・何？

「・・・看板？」

大人の背の高さくらいのも、大きな看板。

えっと、何々・・・？

「走らないでください・・・？」

あたしは、その看板に走ってぶつかったと。  
・・・気をつけよう。

えっと、戸籍登録の窓口は・・・あそこだ。

ちょうど開いた処に、入る。

「こんにちは。おふたりとも、戸籍登録ですか？」

「はい」

「では、この紙に、必要なことを書いてください」



なにやらいろいろ書いてある紙2枚と、羽ペンを渡された。  
・・・うん、文字は問題なく読めるみたい。

えっと、これがごうで・・・あ、そういえば。

「ルーン、生年月日いつだっけ？」

ちなみに、今日は2035年の5月8日らしい。

時間の表記の仕方は全く同じだけど、かなり未来だね。

『適当に考えて。あたしは無理』

『ええっ！』

念話で会話。便利だな。

「・・・2029年の7月26日」

つてことは・・・今5歳か。うん、見た目ともあってるね。

で、あたしは13歳だから・・・

「書けました」

お姉さんに、2枚の紙を渡した。

「“トルム・エレンカー”さんと、“ルーン・エレンカー”さん・・・  
ご姉妹ですね」

「はい！」「ええっ！」

サシャが、いきなり声をあげる。

『ちよつと！なんで姉妹なのッ！・・・まさか、女の子だって書いたんじゃ・・・！』

チツ、鋭いな。

『だってさ、どっからどう見ても女の子だよ？それに、こっちの方がいろいろと便利だし・・・体は女の子でしょ？』

『ま、まあそうだけど・・・』

まだグチグチ言うかつ！

「・・・どうかなさいましたか？」

「「なんでもないです」「」

二人揃っていう。こつこつ所はハモる。

「・・・では、登録内容の確認です」

名前：トルム・エレンカー

性別：女性

生年月日：2022年2月4日

年齢：13歳

現住所：なし

希望する職業：旅人

名前：ルーン・エレンカー

性別：女性

生年月日：2029年7月26日

年齢：5歳

現住所：なし

希望する職業：旅人

「・・・以上で、間違いありませんか？」

「はい」

さつきから、よくハモるな・・・。

「では、戸籍登録者用のブローチです」

シンプルな、紺色をした小さなブローチを2つ受け取った。よく見ると小さく金色の点々がいっぱいあるが、それ以外は全くの無地だ。へえ、可愛いな。

「そちらは、“星屑の都”で登録した証となります。特殊な魔法がかけられていて、身分証明には必ず必要ですので、無くさないようお願いします」

「はい」

とりあえず、キャスケットの横つちよにつけておく。サシヤは、襟につけてるみたい。

「それでは、職業登録所についてください」

「「はい」」

### 職業登録所

結構似たような感じで進んで、最後にブローチを渡すと・・・

ピー

小さな箱に入れるとそんな音がして、出てきたブローチには、水色のスピードのマークが刻まれていた。

「これは、旅人である証になります。これをつけていれば、どこでも働くことが出来ますし、法律に触れない限りは、どのように稼いでも、咎められることはありません。無くさないようにしてください」

「「はい」」

・

・

・

「んー！これで終り？」

あたしは、思いっきり伸びをする。間の抜けた声。

「そつみただね」

・・・サシヤも似たような感じだね。あ、もうルーンかな？  
でもサシヤは真名だって言うてたし・・・いつか。

「じゃー、いこつか」

「んー、そーだね」

二人で、本役所を出る。

さて・・・これからどうしよつか？

役所さんは親切なことに、お金をくれました。ってか・・・いいの？  
それで。

もらったのは、二人で20000。にまんセレンと読むらしい。

サシヤ曰く、1 は1円とだいたい同じだつて。

さて、何買おう・・・やっぱ、食料とか？服も必要かな？

あ、ちなみに。サシヤの今の服は、白のシンプルなブラウスに、紺のフレアスカート。

服の種類は元の世界と変わんないみたいだよ

「ねえ、ちょっと待って！」

ん？だあれ？

振り返ると・・・おう、さっきの美人さん。

「よかった・・・間に合った」

？

「これ、受け取って。餞別よ」

そう言つて、美人さんは五センチほどの太さの赤いリボンを一巻差し出した。

なにやらつやがあり、絹のような感じがする。

綺麗・・・

「・・・え？これ・・・いいんですか？」

美人さんは、微笑む。

「いいのよ。受け取って？わざわざ買ってきたんだから！・・・私はね、あなた達が気に入ったの」

じつと、美人さんはあたしを見つめる。

「え・・・っと。それじゃあ・・・ありがとうございます」

あたしが受け取ろうと手を出すと。

「わー、きれーだねー」（棒読み）

サシャが横一（下？）からひったくる。

・・・セリフが棒読みではありませんでした？

「……………」

あー、美人さんも変な顔しちゃってるじゃないか！

「……じゃあ、私はこれで。縁があったらまた会いましょう?」

そういうと、美人さんは駆け出した。

あーあ、行っちゃった……。

サシヤのせいじゃないの？

そういう意味を込めてサシヤを見下ろす。さっきの綺麗なりボンが目に入る。

あれ……?

さっきと比べて、あんまり……綺麗じゃない……?

……

side サシヤ

さっきのお姉さんが、赤いリボンを取り出した。……でもあれって。

……魔法がかけられている。それも、探知と盗聴、それに催眠。なんてたちの悪い。

トルムが見とれてしまっているところを見ると、魅了効果もついているな……。

しかも、同じ物を自分にもかけてる。

「え……っと。それじゃあ……ありがとうございます」

トルムが、受け取るうとする。

受け取っちゃったら、操られるよ！

こうなったら……

「わー、きれーだねー」

下からひったくる。セーフ、かな。

ついでに、魔法をといっておく。

……お姉さんは、こっちを見てる。

「……じゃあ、私はこれで。縁があったらまた会いましょうっ？」

駆け出した。……二度と来んなよ。



**第六話 登録・・・と不信(サシヤだけ)(後書き)**

お金の単位の記号と読み方は、適当です。

第七話 お買い物(前書き)

今回は、ちょっと短いです。

## 第七話 お買い物

side サシャ

「えーつと・・・じゃあ、これも！」

現在、旅に必要な物を買っています。  
・・・うん、トルム買い物うまいな。

「服も買ったし、食料もこんだけあればしばらく持つかな？」  
ん、終わったかな？

「あ、そうだ、あれも買った方がいいよね。ルーン、行くよ  
そついうと、トルムは駆け出す。  
え？まだなんかあるの？」

.....

「んー、終わりっ！」

や、やっと終わった・・・。

「姉さん、一体何を買ったの？」

「ん？んー、裁縫道具とか？あ、そうだ。ルーン、リボン貸して」

え？なんで？いいけど・・・

「はい」

リボンを渡すと、トルムは小さい箱をカバンから取り出し、チクチク縫い始めた。

「な、何やってんの・・・」

「・・・出来た！ほらルーン、ちょっと後ろ向いて？」

「・・・またなんで？」

「・・・はい」

ボクが後ろを向くと、トルムはの髪の毛をまとめて、なにやらいじり始めた。

「・・・できた！」

「・・・だから何やってたの。」

「はい、鏡」

かばんから今度は鏡を取り出して、僕に渡してきた。

「あ、ありがとう」

鏡をのぞくと・・・

「あれっ?」

・・・ポニーテールになってるの?

「シユシユを作ってみました。上のところにそのままのリボンもつけてるよ。ちょうちょ結びにはしなかったよ!」

・・・へえ。

「・・・ありがとう」

トルムはニツコリと笑う。

「どういたしまして!あとは・・・」

また裁縫道具を取り出して、チクチクし始めた。

「・・・まだなんか作るの?」

僕が言うと、トルムはキャスケットからブローチを外した。

一メートルほどのリボン2本を、ブローチでキャスケットに留める。

なんでそんなことを帽子かぶったままできるの・・・。

「・・・ん。出来た」

そういうと、トルムはクルッと一回転する。  
リボンがたなびく。

「どーお？きれーでしょー！」

「……そうだね」

「……これじゃ、どっちが年上だか、わかんないな。」

side トルム

「さて……と。じゃあ、この街を出ようか」

くるくる回っていたのをやめて、サシヤに向かって言う。

「え？なんで？」

「だって……さ。ふふふっ」

演技力を駆使して、黒く笑ってみる。

サシヤの顔がひきつった。

へえ、神様でも騙されちゃうんだ。

「……冗談だよ。しばらくはいるって！……初めは人の多い街で腕試しがしたいの！」

サシヤの表情が緩む。

「なんだ、そんなことか。……でも、一体何をするの？」

ふふ・・・

「ヒ・ミ・ツ」

そのうち分かるでしょ！

「・・・悪い人に騙されないようにね」

サシヤが、静かに言う。

「善処するよ」

・・・全くっていうのは、難しいかも。努力はするけどな。

第七話 お買い物（後書き）

感想をよろしくお願いします。



## 第八話 トルムの歌

side トルム

さてと、やりますか！

ここは、噴水のある広場……の端っこ。  
ホントは噴水の前でやりたかったんだけど……先約がいたんだもんな。

そこでは、ピエロのかっこをした人が大道芸を披露している。  
まわりには、人垣ができています。

……まあ、あんな目立つ格好してたら、そりゃあ人集まるよね。  
芸も、結構上手いし。

「姉さん、いったい何をするの？」

サシヤは、本日七回目の問を投げかけてくる。

だから……

「見てればわかるって ほらルーン、少し下がって？」

あたしは、サシヤを少し後ろ……広場の端っこの方に押す。

「さーて……お客さんを取っちゃうつもりで、頑張りますか！」

「だから、何をするの！」

少し大きな声でサシヤは言う。  
これで八回目だよ。

「いいからいいから・・・見てて」

スウ・・・

軽く息を整える。

と、周りの音が遠ざかり・・・”自分”の存在が、半分位空気に溶ける、気がした。

「・・・！」

後ろで、サシヤが息を呑む。

さっきまでピエロに夢中になっていた人たちの、何人かが振り向いた。

「　　」

空気を震わせ、音を紡ぎ出す。曲目は、バッハの「主よ、人の望みの喜びよ」。

歌詞はわからないので、メロディーだけだ。

それでも、自分の中に、不思議な力が集まるのがわかる。

元々それほど長い曲ではないはずだけど、それ以上に短く感じられた。

一曲が終わってしまうと、あたしはまた違う曲を歌う。

いつの間にか、あたしの中に不思議な……だけど強い感情が沸き起る。

……もつと。

もつと、もつと……歌いたい……！

side サシャ

信じられない。

僕は、トルムの歌を聞きながら、そう思った。

……始め、彼女が息を吸っただけで、まわりの空気が変わった。それだけで何人かが振り返ったのも、そのせいだろう。

今歌っているのは元の世界ではかなり有名なクラシックの名曲。元々教会カンタータだから、神秘的な雰囲気はある曲だけど……！

……今、彼女の体は青く神秘的に輝いている。多分、限られた人しか見えていないけど。

その姿は……なんていうか、すごく人間離れた美しさだ。

そうか、スキヤンで出てきたあの数字は、こういう事を表していたのか。

僕は、なんとなく納得していた。

おそらく、彼女の”神秘性”は歌う時のみ発揮されるのだろう。

「・・・ミューズのエラトみたい」

口をついた言葉。 だけど、的を得た言い方だと思う。

一曲を歌い終わると、次の曲を。 その曲を歌い終わるとまた違う曲を・・・

彼女は、次々と歌い上げていく。

ワアーン

いきなり、すごい歓声が湧き上がる。 いつの間にか、歌い終わっていたようだ。

さっきまでピエロの方にいた人たちが、全員こっちに来ている。

ふう・・・

思わず、息をつく。

見とれちゃってたじゃないか。

第九話 事後処理、収納・・・事の発端。(前書き)

感想や意見、アドバイスなどくれると、嬉しいです。

第九話 事後処理、収納・・・事の発端。

side トルム

「　　」

歌い終え、息をつく。

・・・ワアーツ！

と、一瞬の間をおいて歓声が上がリ、なにやらいろいろ飛んできた。だけど、頭に靄がかかったようで、上手く考えられない。

・・・何が飛んできているんだろう？

そうこうしている間にも、どんどん何かが飛んできて、足元一面に広がっていく。

目の前の人たちにはつきり焦点があったとき、やっと意識がはつきりした。

・・・。。。

・・・飛んできていたのは、大量の硬貨だった。  
もちろん、足元のお金。

・・・。。。。はい？

訳が分からない。普通に歌っただけなのに・・・

何がどうしてこうなった？

『ト、トルムってば！いつまで放心してるの！』

いきなりのサシヤの念話。

服の裾がつんつん引っ張られているような・・・？

下を見ると、サシヤが困ったようにあたしにしがみついている。そして、そのサシヤの足元も、お金がいっぱいだった。

「た、たすけてよ・・・」

・・・そういって。

あたしは、なんとなく納得する。

一面広がっているので、踏んづけちゃいそいで動けなかったのか。

それに、たまにお金がコツンコツン頭に当たっている。

サシヤは、あたしにギュッとしがみつき、オロオロとまわりを見回している。

・・・ああもう。

「ルーンはかわいいなあ！」

思わずそう叫び、サシヤを抱き上げる。

「ふええっ？」

ん、やっぱり軽いな。

サシヤは変な声を上げてるけど、きにしないきにしない！

「そおい！」「うわあっ！」

ポーンとサシヤをほおり投げる。サシヤなら受身取れるでしょ。で、前に向き直り……

「……ご清聴、ありがとうございました」

左手を上げてから、左足を軽く引きつつ、上げた手をふんわりと曲げて体の前に。

昔習った、優雅なお辞儀。

ワアーツ！

拍手が沸き起こった。

とある喫茶店。

場面変わって、とある喫茶店。

これから旅していくのに、かなり重要な事柄について話し合い中。

ドン

「お、重いね……」

机の上に、大きな袋を乗せる。もちろん、中身はさっきのお金。



ちよつとしたお金持ち気分・・・というか、実際お金持ちだね。  
うーん、ちよつと歌っただけでこんなに稼げるとは・・・億万長者  
も夢じゃないかも。

そんなことするつもりないけど。問題は・・・

「どつやって持っていこう?」

これを持ち運ぶ手段なんだよな・・・。

「・・・持つて歩くにはかさばるし、盗られちゃったらいけないよ  
ね」

さっきの場所からここに来るまでに、何人がこれをするうとしただ  
ろう?少なくとも、絶対二桁は行ってる。

・・・全員とつちめてやったけど。

「そつだよね・・・」

サシャは、頼杖をつきながら、考えている模様。

「なにか良い案ない?」

「いや、今考えてるけど・・・」

・・・なかなか出てきそうに無いね。  
神様なんだから、これくらい・・・

「あ」

・・・いいこと思いついた。なんで今まで思いつかなかつたんだろ  
う？

いろんなお話でも、よくやっていることじゃなか。

「何？どうしたの？」

サシヤがたずねてくる。

・・・うん、われながら名案だ。でも・・・

「じじじゃ出来ないよ。・・・ちよつと、外行こ」

「え？・・・うん、わかつた」

サシヤは、少し顔を曇らせる。

・・・悪いことなんてしないよ！

路地裏。

「・・・ここならいいかな？」

キヨロキヨロとあたりを見回す。

・・・うん、誰もいないね。

「一体何をするの？」

サシヤは、思いつきり不安そう。悪いことはしないって言ってるの

に……。

えっと……まずは集中。って、これしかないけど……。

目をつむり、イメージする。……うー、なかなか固まらないな。元になるようなものが多いから……。

しばらく頑張っていると、もやもやしていたものが形になってきた。それを、自分流に整える。

……うん、こんな感じ……あれ？

「出来た……よね？」

なんか思ってたのより大きい……ってか多い気が。  
……まあ、いつか。

「……だから何をしてたの」

サシャは、すごく不審な目でこっちを見てる。  
もう、信じてくれたっていいじゃんか！

「File 1, open」

たった今作ったものを開く。開いたんだけど……

「……何もおきないよ？」

あれ？おかしいな……何も見えない。

ええい！適当に突っ込んでしまえ！

空中の、なんとなく違和感を感じるところに、袋を突っ込む。

と・・・

「わあっ！？消えた?!」

袋が、消えた。

おお、こんなところにあつた。つてか、感覚でわかるじゃん。

で、後は・・・

「File1/close.iname.it」「金庫」

空中の違和感が消える。

これでよし！

「ああ、小さな亜空間作ってたんだ。・・・ずいぶん使いこなしてるね」

それを見て、サシヤはようやくと納得したように言う。てか・・・

「あたし的には、パソコンのファイルのイメージだけだね。うん、そういう考え方もある」

これさえあれば、食料だろうがなんだろうがいくらでも持ち運べるもんね。

でもあれ？容量に限界ってあるのかな？

「まあ、いいや。やけにいっぱいできちゃったし・・・1000個くらいあるんじゃないかな？それに、増やそうと思えば増やせるし。」

「そうなる管理が大変そうだけど・・・まあ、その時に考えればいいか。」

「あ、そうだ。」

「「金庫」 open.」

出現した穴に手を突っ込んで、中身をつかめるだけ引っ張り出す。あれ？袋はどこ行ったんだろ？ま、いつか。」

「「金庫」 close.」

で、カバンに移して・・・っと。」

「・・・何やってるの？」

「お金払うときにいちいちファイル開いて取り出すの面倒だし、第一怪しまれるでしょ？何も無いところからお金出したら」

「付き合いは短いけど、何を聞こうとしたのかぐらいわかるよ。」

「・・・なるほど」

「・・・やっぱり信用してないでしょ。まあ、今は追求しないことにしよう。」

「・・・さ、お買い物行こ！そろそろこの街出たいし」

「え？なんで？・・・また冗談？」

・・・信用ないね。にしても・・・

「・・・気付いてないの？」

「え、なに？」

・・・神様なのに。

でもまあ、知らぬが仏という言葉もあるし。

「知らない方がいいことも、世の中にはあるんだよー」

「えー？なにそれ？」

・・・あたしだけでも、なんとかなる、かな？

そう、軽く見ていたことが・・・

・・・こんなことを招くなんて・・・。

**第九話 事後処理、収納・・・事の発端。 (後書き)**

現時点で5089アクセス、1540ユニーク。

ありがとうございます！

・・・というか、これは普通ですよね？

## 第十話 蹴散らしてみた。

side トルム

「うーん、これも必要じゃない？」

「そうだね……一応買っとくか」

現在、サシャとお買い物中です。なんだけど……

「……アルグの観客をとりやがって……」

「……ガキと娘っ子だけか。チヨロイチヨロイ」

「……結構狙ってる奴いるな。先をこされないようにするか」

狙われているようなんだけど……。

さっきのピエロの敵討（？）みたいなのが数人、ほとんどがさっきのお金を狙っている模様。

総勢100人は居そう。

なんかヤバくない？

ところで……

「あ、これ美味しそうだな」

……なぜ気づかない。



サシャはずっと干し肉を見比べてる。絶対気づいてないな、これは。

神様なのに・・・いや、神様だから？もしかして。

普段、まわりの空気を読む必要なんて無いだろうからね。

他のお客さんもあたしたちの事を遠巻きにしている。

・・・巻き込まれるのはゴメンだ！ってとこかな？

「姉さん、お会計終わったよ！次の店に行こう」

げ。

サシャは、店の外にずんずん歩いていつてしまう。

あー、あー。さすがに店の中じゃ襲わないから、ここにいたのに・・・

気づくつよー！

「・・・おい！」

「・・・ああ」

「・・・人質をとるか」

「・・・俺たちが一番だ！」

・・・そうきたか。早く助けないと・・・。

だけど、体術じゃ絶対敵わない。泉水先生に教えてもらったのも、

基本だけだったしな。

・・・魔法を使う？

でも、あたしはこの世界の魔法を詳しく知らない。下手にやっ  
て、実際にはないやつなんてやっちゃったら・・・。

「姉さん、遅いよ！早く〜！」

サシヤが、入り口のところでピョコピョコと手を振る。  
その背後に・・・

さっきの男たちの姿が。

「！！ あぶない、ルーンッ！」

「へ？」

サシヤは、パツと後ろを振り向く。

「ごめんよ、嬢ちゃん！」

捕まっちゃう！あたしは、思いっきり駆け出す。

・・・と思ったら。

「そうはさせねえ！」

「先に狙ってたのは、俺だ！」

・・・三人ぐらい同時に飛びかかってきた。

サシャがよけたので、その三人はお互いに頭をぶつつける。

・・・バカか。

「・・・ッ！一体何?!」

サシャは、訳の分からない様子で、周りを見回している。

「ルーン、逃げるよ!」

あたしは、サシャの手をつかんで駆け出した。

「え?うわあっ!」

サシャの足が浮いてるような気がするけど、気にしている場合じゃない。

「逃がすかッ!」

「こら待て!」

もちろん、男たちもついてくる。

待てと言われて素直に待つバカがどこにいる!

「なにを・・・え?」

何をしているんだ、と言いたかったのだろうか。自分の脇を通った一団を見て、変な声をあげる。

人にぶつからないように注意はしているけど、全くぶつからないのは無理だ。

文句を言いかけた人たちは、後ろの男たちを見て呆気にとられる。

「ごめんなさい！」

あたしは、後ろを一瞬だけ振り向いて謝る。

ドンッ

その時、後ろ向きで誰かに思いっきりぶつかってしまった。

「ごめんなさ……え？」

前に向き直り、謝ろうとした。

「もう逃げられねえぞ？」

ガタイのいい男。

……こいつもお金目当てか……。

『ト、トルム！ 囲まれちゃったよ！』

サシャが、念話で教えてくれる。でも、なんで念話？

『わかってるよ！』

こづなったら……

『……サシャ、この世界の魔法の中の、弱い電気をまわりに放出

するよ。なののやり方教えて。感覚とかの事はいいから、詠唱とか、そういうの。』

『え？・・・そうか、了解。僕に続いて復唱して。』

・・・理解が早くて、助かるよ。

「どうしたんだ？嬢ちゃん達」

「金渡せばいいだけだぜ？」

もう逃げられないと見たのか、ニヤニヤと笑いながら男たちは言う。

・・・まったく。バカじゃないの？こんな街中でカツアゲするなんて。目立つちゃうのに。

でも、街の人が通報してくれたみたいだから、そろそろ来ると思うけど・・・

「・・・まあ、こんな雑魚の寄せ集めじゃあ、誰か来る前に終わっちゃうかな？」

「ちよっ！姉さん、何挑発してるのッ?!」

ある程度全員が近くにきてくれないとね。

「なんだとお・・・!」

額に青筋を立てて、男たちは近づいてきた。シリシリと輪が狭まる。

お、きたきた。

あたしは、右手の中いつもの杖を出す。

・・・ん？無詠唱でもできるじゃん。

『サシヤ、詠唱は？』

『・・・弾ける、雷よ。この後に“らいが命ずる”って入るの。魔法名が必要だけど・・・適当でいいんじゃない？あ、漢字でね』

ふーん、なるほど・・・短いな。

「弾ける、雷よ。詠華えいかが命ずる」

そういつた瞬間に、あたしは雷をイメージした。

「ギヤアツ！」

周りにいた男たちは、吹っ飛んだ。一番近くの人と地面は、軽く焦げている。

『・・・あれ？おかしいな・・・ちょっと感電するくらいにするつもりだったのに・・・』

『・・・手加減を覚える必要があるね』

全くだよ。

「コラッ！そこ！」

お、おまわりさん（？）が来たみたい。

「くっ!」「逃げろ!」

男たちは、逃げようとする。

だけど・・・無理だね。大勢のおまわりさんが現れて、全員を捕まえた。

「・・・こいつら街の中で暴れるから、困っていたんですよ。逮捕しようにも、人数が多いもんだから・・・ご協力、感謝します」

いつの間にもやら後ろに来ていたおまわりさんが、そう言って頭を下げた。

「えっ、頭を上げてください!別に、私は襲ってきたのを追い返しただけですから・・・」

あたしは、そういつ。

『キャラ変わってるよ?』『・・・わざと』

サシャ、そうに決まってるでしょ?

「それでは、私はこれで失礼します」

おまわりさんは、もう一度あたしに頭を下げると、男たちを連れて去っていった。

side ????

一人の少女が、どこからともなく杖を取り出し、大勢の男達を一撃で吹き飛ばした。

それも、雷属性の中の最低レベルの魔法で。

あの子の体から、底知れない魔力が湧き出ているが・・・  
詠歌なんて魔法名、聞いたことも無い。

あそこまで実力の有り、しかも幼い魔法使いがいたら、噂になりそうなものだ。

・・・あの子に頼もう。

騎士団長様などがいたら、「どこの者とも知れぬ輩を、あの方のそばに置くなど・・・」なんて怒りそうだけど、今彼は、陛下の護衛で隣国に行っている。  
いや、彼だけではなく、騎士団員全員が別の国や、国の端の邦に行っている。

だから、一時的な護衛を探すことになったのだ。

それに・・・

私は、彼女に目を戻す。

頭を下げている保安官に、オロオロと何かを言っていた。

その足元では、彼女の妹らしき少女が、彼女の服をつかんでいる。

・・・なんだか、信頼出来そうだ。



「くくっ・・・」

私は、思わず笑う。

・・・さて、彼女が宿に戻ったら行きますか。

そう思い、私は路地裏の影に姿をくらました。

第十一話 ホントの、事の発端。(前書き)

サシャ「ホントの”ってなんだ！この間のは違うの？！」

うーん、こっちが始まりで、こないだのは原因・・・ってと？」

サシャ「僕に聞くな！」

## 第十一話 ホントの、事の発端。

side トルム 宿屋、“流れ星”の一室。

「んー・・・」

あたしは、思いつきり伸びをする。

「・・・つかれた」

サシャはベットに倒れこむと、そうつぶやいた。  
まあ、昼間はいろいろあったからねえ。

異世界に来てからやっと一日経ったところだなんて、とても思えない。

よし、今日は寝る！何が何でも！

「おやすみ・・・」

サシャも同じ気持ちだったみたい。いきなり寝息を立てている。

こういうのを、我が家では“パタン、キュー”という！  
ほんとにすぐに寝たら、真ん中の“、”がなくなる。

・・・って、あたしは何を言っただけ？

トントント

「トルムさん、お客さんですよ」

ノックの音が聞こえ、宿の人がそういう。

もー、こんな時間に……まだ六時か。でも、誰？

でも、あたし一人は……ね。どうせなら……

「ほら、ルーン……起きろ！」

サシャを、ベッドの外に押し出す。もちろん……

ゴン

おー、すごい音。

「っ痛ー……なにすんだ！」

サシャは、飛び起きて怒鳴る。こんなこと、前にもあったな。

「誰か、来てるんだって」「……？」

サシャは、首を傾げる。

もー、飲み込みが遅い！

「さー、行くよ！」「え？……うわあっ！」

……何がおきたのかは、ご想像にお任せします。

“流れ星”、一階。

「え……っと。はじめまして……ですよね？」

目の前には、焦げ茶の髪をした男の人が微笑んでいた。

……多分初対面だと思うけど、如何せん印象が薄いもんだから……  
どっかで会ったことがあるかも……

「そう考えこまなくても、君と僕は初対面だよ……自分の印象が薄いことくらい、わかってるさ」

軽く微笑みながら、そういう。

あ、やっぱりそうか。でも、そうなるの一つ疑問が。

「……私たちに、何か、用ですか……？」

一体何のようなんだよ！

あ、ちなみに。今はいつもと言動とか行動とか変えてるよ？

初めてサシャと会った時も、こんな感じだったでしょ？

慣れない人の前だと、こうなっちゃうんだよ。前の世界でもよくや  
ってたからね

もちろん、意図的にやることもあるよ？通称“猫かぶりモード”！

って、またあたしは……。

「ふふっ、そう固くならなくともいいよ。・・・今はね」

また、微笑みながら。・・・最後のは何？  
てか、表情が読めない・・・。

「・・・ここじゃダメだね。ちょっと、外に来てくれる？」

そう言つて、彼・・・えーい、チエシヤ猫さんでいいや。いっつも笑つてて、考えが読めない。チエシヤ猫さんは、外へ出た。  
あたしとサシヤは、その後を追う。

「・・・こつち」

そう言つて、路地裏に入る。空は、だいぶ暗くなっていた。

『ねえ、なんかの罠だったりしない？昼間の仕返しとか』

サシヤはそういうけど・・・

『んー、大丈夫じゃない？』

あたしは、直接悪いことをしようとしている人はだいたい分かる。  
まあ、たまにわかんないけど？

「ここならいいかな？」

チエシヤ猫さんが、不意に止まる。

クルッと、こつちを振り返る。

「・・・君たちに、正確には“君”に、一つ仕事を頼みたいんだ」

チエシヤ猫さんは、あたしのことを見据えながら、静かに言った。

「・・・仕事？」

彼は、コクリと頷く。

「・・・イール王国の第一王女シエーラ様、第三王子ヘルン様、それに・・・第二王女、リトナ様の護衛を」

チエシヤ猫さんは、淡々と・・・だけどしっかりと告げる。不思議な威圧感を出しながら。

もう、印象薄いなんて思えない。

・・・風が、緩やかに吹いていた。

第十一話 ホントの、事の発端。(後書き)

感想が来た！

サシャ「・・・テンション高いね」

しかも褒めてもらったよお！

サシャ「・・・聞いてないな」

これからも、頑張ります！

現時点で6865アクセス、1975ユニーク。

感想もお待ちしてます！



## 第十二話 大慌て（前書き）

更新が遅れて、ごめんなさい！

お気に入り登録が10あったのに、もう7になってるし・・・。

今回は短いですが、これからは頑張ります！

## 第十二話 大慌て

side トルム

.....。

「「えええ〜っ!?!」」

揃って大声を上げる。

いきなり何っ? 護衛?

「.....まあ、予想通りの反応だね」

チエシヤ猫さんは、相変わらず微笑みながら、言う。

.....あれ? さっきの威圧感はどこいった?

てか、そもそも.....

「イール王国って、どこ?」

ズコッ

.....?

なんか、今変な擬音が聞こえたような.....。

擬音が聞こえるっていうのも、変だけど。

「.....姉さん、イール王国っていうのは、今いるこの国のことだよー!」

え、そうなの？

『……教えてなかったっけ？』

『教わってない』

『……』

ん、無言電話だ。

……なんか、無言電話みたい。

「……どんな田舎から来たの……？」

あー、呆れられたかな。

「……まあ、詳しいことは、明日正式に使者を送るよ。……どんな要件を言われても、実際の仕事は護衛だから」

？ どういう事？

「……それじゃあ、また明日」

チエシヤ猫さんは、そういうと路地のさらに奥に行ってしまった。

……もう見えないし。どんだけ足速いんだよ……。

「……帰ろっか」

サシヤが、ポツリという。

「・・・そうだね」

再び、“流れ星”。

「あー・・・」

サシャが、ベットに仰向けで倒れこむ。  
あたしも、同様に。

「「疲れたあ！」」

・・・やっぱり、よくハモるね。

「おやすみ・・・」

サシャは、そういうと静かな寝息を立て始める。

まだ夕飯食べてないけど・・・眠い・・・。

あたしも、すぐに眠ってしまった。

次の日。

「ほら、お客さん！起きて！」

すぐそばで、女将さんの大きな声がする。

・・・ん？何？

「ほら、早く起きてくださいよ！もう十一時ですよ！」

え？

「「ええっ?!」」

もうそんな時間？

勢い良く目を開ける。

隣で、サシヤもビクツと動いた。

・・・つて、あれ？なんで体は起こしてあるんだろ？

「さあさあ、はやく!・・・あなた達の噂を聞きつけて、王宮から使者がやってきたんですよ！」

・・・ああ、昨日チエシヤ猫さんが言ってたな。

サシヤも落ち着いたものだが、女将さんはものすごく興奮している。  
・・・そりゃそうだな。

「さあさあさあ！」

女将さんは、そのままあたしたちを部屋の入口の方へ押していく。  
・・・つて、おい!

「まだ着替えてないですよ！髪だつて・・・」

さすがに、寝起きのボサボサの髪で人前には出られないし、今寝間着じゃないの？

「大丈夫ですよ、さつき宿の者が軽くとかしましたから！それに、お客さん昨日は服のまままで寝てたでしょう？」

あ、そっか。

でも、あたしの髪って、ちょっとやそつとじゃとけないよ？

『トルム、“あなた”の設定の影響で、お肌とか髪とかは結構いい状態を保てるようになってるんだよ！ちなみに、僕のは絶対にグシヤグシヤにならないの。神様だからね！』

へえ、便利だなあ・・・って、髪！帽子とつちやったらものすごく長いはず！

「それにしてもお客さん、綺麗な髪ですねえ」

・・・はい？

思わずパツと頭に手をやる。

あれ？

髪の長さ・・・普通だね。

『あ、寝てる間に帽子取れてたから、ちょっといじったよ。多分、イメージしたら長さ変えられるんじゃない？』

・・・サシヤ、ありがと。

「……おな、お客さん、早く早く!」

そう言って、女将さんはまたあたしたちを後ろから押して行く。

もー、押してもらわなくても歩けるよお!

ロー。。

う……緊張する……。

目の前には、金髪に青い目の青年。やっぱり、ちょっと威圧感がある。

にしても、どっかで見たいことがあるような……?

「それではこちらの馬車で向かいますので、来て下さい」

そう言って、彼はさっさと歩いていってしまっ。

あ、そうだ、忘れるところだった。

あたしは、クルツと後ろに振り返り……

「お世話になりました!」

一礼すると、彼を追いかける。

さて、頑張るぞ!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7967k/>

---

ファンタジー大好きで小説が好きでよく書いているけど下手の横好きっばい、

2010年10月15日01時47分発行